小学校国語科における討論学習についての一考察

～三角討論の試み～

お茶の水女子大学附属小学校

阿　部　藤　子

はじめに

Ⅰ　小学校におけるディベート学習の問題点

　1　国語科におけるディベート学習の位置づけ

　2　ディベート学習の問題点

Ⅱ　ディベカッションの提案と実践

　1　ディベカッションとは

　2　「インスタント食品と私たちの生活」（東京書籍５下）を

　ディベカッションで取り組んだ実践　　平成19年２月実践

Ⅲ　三角討論の実践(1)

　1　三角討論（三角ディベート）とは

　2　「インスタント食品と私たちの生活」　　平成22年２月実践

Ⅳ　三角討論の実践(2)

　「スアレスのハンドは賞賛に値するか，非難されるべきか」

　平成22年７月実践

Ⅴ　３実践からの考察

はじめに

稿者は，これまでの教職経験のうち，比較的，低中学年を受け持つことが多く，５年生を受け持っても６年生には持ち上がらずに次年度は他の学年を受け持つこともあった。それがここ近年，５，６年生を続けて卒業まで受け持つ機会に恵まれ，国語の学習においては，低中学年では経験することのなかった討論会や話し合いの授業を行う機会があった。

一方，20年ほど前からディベートが教育現場で行われるようになり，特に国語の教科書にも小学校高学年から取り上げられて，その実践が行われてきている。現在ではひところほどの盛んな実践報告は目にしないが，ディベートという方法で討論する力をつけさせるということが求められていることは変わりはない。

稿者は，ディベートに興味を持ちつつも，その指導を実際に行うことはなかったわけだが，この数年それを実際に行ってみていくつかの問題点も見えてきた。本稿では，その問題点を示しつつ，それを克服すべく改良を試みながら実践した記録をたどり，新たな討論学習のあり方を提案したいと考えている。

Ⅰ　小学校におけるディベート学習の問題点

１　国語科におけるディベート学習の位置づけ

ディベートは，古くは古代ギリシャから教育の中にも取り入れられていたとされている。日本では福沢諭吉が初めて日本にもたらしたと言われる。日本の国語教育の中では，1990年代以降，論理的に物事を考え相手を説得するための学習として討論学習の中に組み込まれて行われてきた。その目的を整理すると以下の３点になるであろう。

・論理的に物事を考え，幅広いものの見方，考え方をできるようにする。
・討論の仕方を学び，特に相手を説得させる話し方をできるようにする。
・２項対立で物事をとらえることで認識を深め，自分の考えをもつこと。

多くは，ある論題を巡って肯定側，否定側に分かれ議論し，主に，「聞く・話す」の領域の学習として行われてきた。また，この学習法を生かして国語学習の中で「読み」の学習を深めるための手だてとして実践も紹介されるようになった。

現行の教科書ではおよそ小学校５年生で，ディベートという討論の形式を知り，身近な論題でディベートを経験するという単元構成を組んでいるものがほとんどである。

２　ディベート学習の問題点

現在では広く行われているディベート学習であるが，小学校段階で行うには問題点や配慮しなければならないことが多くあると考える。

①　良さを認め合うという姿勢が育ちにくい

相手を説得し負かそうとするため，どうしても相手側のあら探しをし，非難しようとしがちになる。相手の足りないところや論理的に弱いところをつくことで優位に立つわけで，大人であれば言い方を配慮しながら述べることも出来るが，小学生の場合は，口調も攻撃的になり，相手の良さを見つけよう，認めようという学び合う姿勢を育てたいと考える教師にとっては，指導が難しい。

②　勝敗（審判）にこだわり，勝ち負けにのみ意識が行く。

審判が勝敗を決めるのがディベートの一般的なやり方である。だからこそ子どもたちがおもしろがって取り組むという面はある。しかし，審判を下すのが教師か子どもか，そのいずれにしても問題をはらんでいると考える。論理的に優れていたのはどちらかを子どもが客観的に判断できるのか，教師が下すにしても教師の決を待つ，という文化を子ども達にしみこませることになるのではないか。負けるより勝ちたいと思うのは当然で，きちんとした話し方を身につけよう，考えを深めようという本来の目的よりも勝つことだけが目標だと思いこんで取り組んでしまうところが否めない。

③　子どもたち同士の人間関係に好ましくない影響を与える。

①②との関連で，勝った負けたがしこりになり，学習が終わった後も，負けた側が痛手を負う傾向があろう。論破され，非難された，ダメだったというマイナス経験としてその学習が残る。相手方の子によい印象を持てず不信感を持つということも考えられる。

④　立論，反論，という型に則って行えず，ついつい口を挟みうるさくなりがち

ディベートには立論，相談，反論，相談，また反論という型があり，時間で区切るなど制約が多い。しかし，短い時間の中で進行させることの難しさと同時に，相手の立論の最中に思ったことを言いたくなって口を挟んでしまう，相談の時間まで待って次の反論で言いたいことを言うという事が出来にくい子どももいる。指導によって防げる部分ではあるが，小学校という発達段階では，決められた型の秩序のなかで進めるディベートの難しさであると感じている。

Ⅱ　ディベカッションの提案と実践

1　ディベカッションとは

Ⅰで述べたディベートの問題点を少しでも改善すべく，ディベカッションという討論形式を用いて実践を行った。

ディベカッションとは，村松賢一氏が提唱した討論方法である。ディベートの後でディスカッションを行うことで，上記の問題点を少しでも解消できるのではないかと考えられたやり方である。ディベカッションという名称は，村松氏による命名である。

稿者は，ディスカッションが加わることで，制約の中で言えなかったことわからなかったことを言える子どもが増え，冷静に論題について考える時間が持てることを期待してこの方法に取り組んでみることにした。しかし，ディベートの部分のやり方も小学生向けに変形することでディベートの問題点の改善につなげる必要も感じた。そこで，以下の２点を従来のディベートと変えて行うこととした。

①　立論，反論やその相談に時間制限を設けない

短い時間の中で立論，反論を述べること，相談を進めることは困難を伴う。立論は，準備段階で時間をかけ，時間内に話す練習をすることも可能である。しかし，反論や，特に相談にはある程度の十分な時間を与えることがその後の討論を充実させるためには必要と考える。ディベートに慣れてきたら時間の制約をかけることも考えられるが，経験の浅い学級，子ども達にはそのような配慮が必要ではないか。

②　審判を下さない・最終目標を自分の考えを深めることに置く

先述のとおり，勝敗にのみ子どもの意識がいくため，相手を負かすことが目的になってしまう。目的は，話し合うことで自分の考え認識を深めることにあることを子ども達に伝え，勝敗は決めないで行うこととする。最終弁論が終わった後では，個々に考えをまとめる時間を持ち，それを紹介し合うことを学習の結びとする。

2　「インスタント食品と私たちの生活」（東京書籍５下）をディベカッションで取り組んだ実践

平成19年２月実践

(1)　単元設定の趣旨

①　理由や根拠を挙げて意見をもつこと

この学年の子ども達は５年生になってから，題材や論題に対して自分の考えをはっきりもつこと，さらに，その意見，考えの理由や根拠を明らかにすることを学んできた。これらの学習から，その理由や根拠が「好きだから」「慣れているから」というような好みや感覚的な理由ではなく，より客観的な根拠の方が説得力があること，また，理由や根拠が見方を変えると意見を支える根拠として弱かったり強固だったりすることに子ども達は少しずつ気づいてきている。そこで，次のステップとして，理由や根拠を，データや調査などのより客観的な情報から得て意見を述べるという学習を考えた。一つの問題も，違う角度から調べてみると新たな情報が得られ，考えを広げたり深めたりすることに役立つことを経験させたい。

② 学習材について

インスタント食品の利点と欠点について，わかりやすく述べられている。今回は，既に学習材に述べられている利点欠点について細かい点まで調べ，根拠をより強固なものにする学習を行う。例えば，同じラーメンを，手づくりのラーメンとカップ麺では，栄養に違いはあるのか，添加物はどうなのか，出るゴミの量などを調べると，どちらを選んで食べるか，意見が分かれるところだろう。子どもたちが，リサーチすることで新たな情報を得て，それらから自分の意見を組み立てていく学習を行う。

③ 育てたい力

i 自分がリサーチしたことや根拠として考えていることを相手にわかるように説明できる。

ii 自分の根拠や考えと他の発言がどう異なるのか同じなのか，かみ合うところはどこなのかを考える。

iii 相手の主張を受けたうえでの「返す」が行われること，論点がずれたり自分の主張のみしかできない発言にならないこと，攻撃ではなく説得であり，勝ち負けではなくより深い認識や新しい結論に至ることをめざした話し合いにしたいと考える。

④ 指導上の工夫

i 主張することを可視化する…あらかじめ立論の段階で，どんなことを根拠に主張しようとするのか，相手方の友達にも聞きながら目で見られるようにフリップボード風に画用紙に書かせておく。発表しながら見せる。発表が終わったら，黒板に掲示し後からも見られるようにする。

ii 反論の予想…反論の予想をしてディベートに臨むことで，安心感をもって討論に参加できる。

iii 論点を明確に…子どもたちだけに任せた討論だと，とかく論点がずれたり焦点化できないことも多い。初めてのディベカッションでもあるのでディスカッションの所では，教師が司会をする方法をとる。

(2) 単元の目標

① 組み立てや述べ方に注意しながら内容，筆者の考えを正確に読み取る。

② 情報を集め，理由・根拠を明らかにして自分の意見を述べる。

③ 相手の主張と自分の考えを結びつけ，互いの意見を深めようとする。

(3) 学習指導計画（８時間扱い・本時８／10）

① 全文を通読し，学習の見通しをもつ。（１時間）

② インスタント食品についての筆者の考えを読み取る。（２時間）

③ インスタント食品の利点欠点について調べたり実験したりして情報を集める。（２時間）

④ 賛成・反対に分かれその根拠を整理し，グループ（根拠，理由ごと）で主張の準備をする。（２時間）

⑤ 根拠を明らかにしてディベカッションを行う。（本時）（１時間）

⑥ 学習のまとめをする。（討論を振り返る・自分の考えをまとめる）（２時間）

(4) 本時の目標

① インスタント食品の是非についてディベカッションを行い，根拠をもとに意見を述べる。

② 相手の根拠の有効性に気づいたり，反論の視点に気づく。

(5) 学習の実際と考察

本時の流れ〈論題：インスタント食品は積極的に利用すべきである〉

○立論（賛成側・反対側）を行う。

○作戦タイム

○反論（反対側・賛成側）

○ディスカッションを行う。〈インスタント食品をどう利用していくのがよいか〉

○ディスカッション後の自分の考えを書く。

① ディベートでの立論から見えたこと

立論では，賛成側が，短時間で調理できること，賞味期限が長いこと，価格が安いことの三つを根拠に発表した。それに対し，反対側は，栄養の偏りや健康によくないこと，添加物が多くおいしくないこと，味の調節がしにくいこと，ゴミ，特に不燃ゴミが多いことを根拠にインスタント食品を積極的に利用すべきではないと主張をした。

A　：次は，賞味期限についてです。普通の麺は，４日から２週間ですが，カップ麺は２ヶ月から半年もちます。一番長くもつもので10年もちます。それは，福山さんがもってきたものです。

B　：僕たちは僕たちは，価格を調べました。生ラーメンは，10円で具はありませんが，カップ麺は100～150円で具があるので…カップ麺の方が…

C　：値段は同じなんだけど，具なしだと生ラーメンは野菜とかも買わなきゃいけないので，麺だけで100円くらいで，カップ麺は具が入って100～150円です。

教師：賛成側は，「この三つの根拠からインスタント食品を積極的に利用すべきである」と言うといいね。拍手。反対側どうぞ。

D　：私達はインスタント食品を積極的に利用すべきであるという意見に反対です。反対意見のその１は栄養のことです。インスタントラーメンは，脂質が28.1ｇで，それに比べ生焼きそばは，ラーメンじゃありません，焼きそばです。3.7ｇで６倍になりました。ちなみに一日あたりに食べる脂質は約25～30ｇです。

E　：また，インスタント麺を揚げるために使っている油は，トランス脂肪酸という古い油を使っていて，心臓病を引き起こす可能性があると言われています。

F　：その結果，体に悪いことがわかりました。

H　：インスタント食品に反対の意見の三つめは，味の調節についてです。これは，ラーメンの場合です。インスタントラーメンは塩分が多く塩辛いです。また，味が決まっていて，お好みにすることができません。また，手作りの場合は，野菜などを入れたいだけ入れてお好みにすることができます。

I　：このことは，紅茶でも言えます。インスタントの紅茶は，甘過ぎたり粉っぽかったりして自分の舌に合わないことがありますが，手作りの場合は，砂糖や牛乳の量を増やすなどして自分の好みにすることができます。なので，インスタントより手作りの方がお好みにできていいと思います。

Ｂの児童は，インスタントと生のラーメンでは一食の値段はほとんど同じだが，インスタントは具も入っての値段だから，具なしの生ラーメンより安上がりだと言いたかったのである。しかし，それがうまく伝えられず，同じグループで立論の準備をしていたＣが補足言い換えの説明を加えていた。討論には，自分の考え根拠を明確に述べられることが大前提だが，子どもの実態によっては，また，緊張の加減などによってもこのようにうまく説明できない場合もある。今回は，同じグループの補説という形で，ＢもＣも，また周りの子どもにとっても学び合いの貴重な経験になったと考える。

ほとんどの子どもが，何らかの形で立論の発表に立った。ディベートで，一人で立論，反論，結論を述べ討論に参加するのは難しい。しかし，友達と立論の相談をし，各自が自信をもって立論に参加する姿が窺えた。

② 的確な反論と話題が拡散し逸れていくやりとり

J　：値段のことについて反論です。インスタント焼きそばの場合，一食の平均が150円です。

K　：それに比べ，生の場合は，よく売ってるのが240円で三人前の商品です。肉などが100円で350円が三人前として，一人前は113.3円で，焼きそばの場合は生の方が安いです。

H　：そのことは，おみそ汁でも言えます。家で作るみそ汁の場合，３人分をいっぺんに作ったとして，わかめ，豆腐，味噌を入れてだいたい200円ほどです。それを一人分にすると，だいたい70円ほどです。それに比べ，インスタントのみそ汁は，一人分が，127円です。これでみると，普通のみそ汁の方が安いので，いつもインスタントの方が安いわけではないことがわかります。

～中略～

L　：私達は保存期間に対して反論があります。

D　：生ラーメンだと冷凍保存がきくけど，カップは冷凍保存がきかない。　～ざわざわ～

H　：生ラーメンは２つに分けて，半分は冷凍して半分は今食べるとかできるけど，カップ麺は，半分に割って片方冷凍するとかできないので生ラーメンの方が便利です。

教師：「便利です」が言いたいの？

H　：冷凍すれば保存できます。

教師：冷凍すれば長く保存できるし，保存の仕方はいろいろあるでしょってことね。　～中略～

M　：さっき言われた味の調節のことなんだけど，インスタントは塩分が多く塩辛いって言ったけど，それがおいしいっていう人もいて，それは，人の味覚の問題です。だからいちいち一人一人のことを言うべきではないと思います。それにお好みにできないと言いますが，塩ラーメンとか（他の味のラーメンとか）あるのでそれを買えばお好みにできると思います。それに水で薄めれば，お湯で薄めればいいと思います。
　：まずくない？
M　：まずくないよ。人の味覚の問題だって言ってるだろ。　～中略～
I　：さっきM君がお湯をかければいいって言ってたけど実際にやったらおいしくない。
M　：味覚の問題と言ったろ。
I　：だから，一人一人の味覚の問題だから好みに合わせられた方がいい。
　（手作りの方が好みに合わせやすい）

このプロトコルの前半では，インスタント食品が安上がりだという主張に対し，反対側が，焼きそばやみそ汁を数人分作ろうとすると一食当たりにすれば必ずしも安上がりではないことを主張している。一人分で比べるのではなく多人数分で比べた場合の有力なデータを持って反論し，相手を説得させる主張といえる。それについて，どんな料理なら，作る食数によってなど，もう少しデータや経験を出させてもよかっただろう。

一方，中盤のやり取りでは，保存期間は，冷凍してしまえば差はないという主張だが，これは，強引に自分たちの主張の弱点をそらす作戦といえる。（本人達はそんな自覚は無いと思われる）常温での保存期間で比較することが比べることであり，冷凍することと一緒にすることは議論をややこしくする。子どもの，ある意味で一人よがりというか，自分たちに有利な情報は全て主張しようとするためだろう。

③　まとまらないディスカッション

反論の後，自由なディスカッションの時間をとった。大勢の子が発言し，活発かつ，フランクに発言がなされた。しかし，この段階では，各自が思い思いのことを主張し，プロトコルを追うと，話題は，冷凍と保存期間→栄養→味の調節→ごみ→味の調節→アレルギー→リサイクルへと転々としていく。後半のプロトコルの，味覚の問題のやり取りの所では，味覚の問題は一人一人の好みの問題になり議論しても仕方ないというMの発言に対し，I児が，一人一人の好みに合わせられるからこそ，インスタントでなく手作りの方がよいと反論している。その論理性に他の児童は気づかず，次々と主張が展開されていった。話題を整理しながら観点ごとに意見を出させるべきだった。

(6)　学習の評価（成果と課題）

①　リサーチすることで新しい面が見える経験

一通り教科書に書かれていることはわかっても，実際に調べてみたり，実験してみたりすると，自分が獲得した証拠とも言うべきデータを持ち得たこと，それを根拠に議論に参加できる自信，それまでは，インスタント食品もお手軽でいいと思っていたがとんでもないと思ってしまう（または逆の）自分の認識の変化に驚きと発見があった子も多かった。

ちょうど，家庭科や社会科の学習で，ゴミ問題，消費生活についての知識や関心が高まってきた時期であったことも幸いした。流通，コスト，添加物などより専門的な知識が増えていく高学年以降で適材と言えよう。

②　討論学習のステップ

・用意周到型の説得

ディベートやディスカッションに至るまでの準備，耕しにも時間をじっくりかけることが必要だと感じた。今回は，学習材の通読，各自のリサーチ，それを元にした賛成・反対派内での話し合いを経ているので，どの子にも，主張したいことが明確に持てており，主張したいという意欲も旺盛だった。リサーチの過程で，反論の予想とそのまた反論まで準備して臨めたことも，自信に繋がり，経験の浅い子どもたちにとってのディベカッションは，このようなステップを踏むことも必要と感じた。

・討論を振り返る学習

本時では時間がなかったので，自分たちの話し合いを振り返る学習を次時に行った。議論で熱くなっているところで「今の発言のしかたについて」「述べ方のいいところは」などとストップをかけるのは好

ましくないと考えてである。立論で，インスタントと手作りを比較して言う述べ方の良さ，データの見せ方，話し合いの食い違いの箇所などをビデオを見せながら，気づきを掘り起こしていった。討論が終われば学習は終わりではなく，次の討論に生かす学びを行いたいものである。

・討論の焦点化と状況対応型の説得・討論へ

ディスカッションで話し合いが散漫になったのはまさに，教師が焦点化できずに，子ども任せに話をさせてしまったためである。議論の途中で，何のために今話し合っているのか，つまり，インスタント食品の善し悪しを決めるためではなく，「今の忙しい生活の中ではどう使っていくのがいいか」「成長期のわたしたちが健康的な食生活を送るために」などのように，子どもたちに最も関心が高い観点に絞って，ある条件下ではどう使えばよいかなどの話し合いに持って行くべきであったと考えている。教師でも，この舵取りは難しいが，子どもたちからも，そのような方向付けの発言が生まれるような討論ができる子に育てたいものである。

今回の実践では，用意周到型の説得・討論が主となった。今後は状況対応型の説得・討論へのステップのあり方を考えていきたい。

③　攻撃・非難の発言

上記(5)の②のプロトコルからわかるように，M児は「味覚の問題と言っているだろ。」のように感情的になり，強い口調で発言していた。冷静に聞くと個々の味覚の問題だから，インスタント食品の良し悪しの判断はできないということを言いたいのかもしれないが，ただ，自分の思いを言い張るのみである。この子に限らず，このような姿がやはりあちこちの場面で見られたのである。

Ⅲ　三角討論の実践(1)

1　三角討論（三角ディベート）とは

Ⅱの実践後，ディベートの良さを生かしつつ，ディベートの問題点を解消して子どもたちが聞き合い共感し合いながら討論できないかを考えた。ディベートの二者対立の形を解消し，三角（３つの立場に分かれて）でディベートを行うことができれば，可能なのではないかと考え三角討論を試みた。

①　三角討論では〈賛成〉〈反対〉のほかに〈中立〉という立場を設ける。

賛成と反対は，中立に向かって立論や反論を述べる。説得の相手は中立の人たちである。これは，賛成側と反対側が中立の人たちに向けて説得しようとすることで，賛成，反対の両者が正面から向き合って言い合う形にならないようにすることになる。また，机も三角に三者が向き合う形にする。

②　中立は，立論・反論が述べられた後，質問をする役，いいと思った発言には赤札を挙げて合図する（評価）役をする。この質問が，立論や反論を掘り下げ，確認し合い共感しながら討論を進める方策となるのではないかと考える。

2　「インスタント食品と私たちの生活」平成22年２月実践

Ⅱのディベカッションの実践後，平成21年度に再び５年生を担当した。このときの経験をふまえⅡと同じ単元を三角討論の形で行うこととした。

賛成・反対・中立の立場を決める。中立は消費者として，インスタント食品を利用する，しない，どう利用するかを判断する人として行った。

なお，ここで行った三角討論とは，三角でディベートを行いその後でディスカッションを行うことを指し，ディベカッションを三角で行うものと定義したい。

(1)　学習の概要

①　教材を読み学習の方向を話し合う。（３時間）

②　インスタント食品について調べ情報交換しあう。（３時間）

③　ディベートの準備をする。（３時間）

④　三角討論を行う。（２時間・本時１／２）

⑤　三角討論のまとめをし，自分の考えをまとめて意見文を書く。　（4時間）

(2)　学習の実際

三角討論は①賛成側の立論→②中立の質問→③反対側の立論→④中立の質問→⑤反対側の反論→⑥賛成側の反論→⑦賛成側の反論結論→⑧反対側の反論結論→⑨ディスカッションの順で行った。⑨のディスカッションは，ディベートのあと，自由に意見交換をする時間を設け，最終的には各自が自分の考えをまとめることで学習を結んだ。

以下のプロトコルは⑥までのものである。傍線は立論で，根拠として述べたものである。また波線は，中立側の質問で，後に考察するものである。

T：教師　　C：名前が聞き取れない児童　　A～U：それぞれの児童を表す

T：論題は「私たちはインスタント食品を積極的に利用すべきだ」です。（板書）
普通のディベートと違って今日は消費者役も加わってのディベートです。賛成側も反対側もこの人たち（消費者）に向かってこの人たちに納得してもらえるように話しましょう。
消費者役の人はいいなと思ったら赤丸を挙げ，質問もしてください。
ディベカッションのディベートを始めます。

〈賛成側の立論〉

A：私たちはインスタント食品を積極的に利用することに賛成です。その一つ目の理由は，急いでいる時に早く食べられることです。例えば，インスタントのミートソースの場合，８分でできるけど，手作りでは全部入れると３時間かかります。

B：２つ目の理由は，インスタント食品はとても安いということです。例えばインスタントラーメンだと130円，手作りだと800円，差が670円もあります。

C：３つ目の理由は，長く保存ができるということです。クリームシチューを例に挙げると，インスタントは５か月もちますが，手作りは１日しかもちません。

C：ですからインスタントのほうが長もちします。

D：インスタント焼きそばの栄養は，炭水化物，エネルギー，タンパク質が手作りよりもインスタントのほうが多く摂れます。例えば，インスタントの焼きそばでは，炭水化物が108.8ｇ，エネルギー727kcal，たんぱく質12.6ｇです。それに比べ，手作りは，エネルギー410kcal，たんぱく質10.5ｇ，炭水化物は77.6ｇです。

E：インスタントのほうが栄養をたくさん摂れます。これで，賛成側の立論を終わります。

〈賛成側への質問〉

C消費者：エネルギーって，多いほうがいいんですか？

C：もちろん。

F（消費者）：タンパク質って多いほうがいいんですか？

T：それも含めてあとで反論してください。　チェックだけしておこう。（立論のフリップに印を入れる）

G（消費者）：インスタント食品のほうが栄養がとれるって言ってましたが，それは別のインスタント食品でも言えますか？

H（消費者）：手作りって，ミートソース３時間かかるっていうんですけど…

A：ソースを全部作るとグツグツ（煮るから）かかる。

I（消費者）：栄養って，焼きそばの栄養なんですけど，そこに書いてあるエネルギー，炭水化物，タンパク質だけですけど，他にもナトリウムとかビタミンとか，いろいろそういう栄養はどうなるんですか。

J（消費者）：長くもつっていうのは，インスタントは買ってからですか，作ってからですか，あけてからですか？

〈反対側立論〉

C：私たちは，インスタント食品を積極的に利用することに反対です。
第１の理由は，安全性が心配だからです。インスタントラーメンの麺の中には，トランス脂肪酸というものが含まれていて，トランス脂肪酸をとると，心臓病になりやすくなったり，喘息やアレルギー性鼻炎や皮膚炎になったりします。また，容器の中に環境ホルモンというものが入っていて，お湯をかけるとそれが溶け出します。精液が減ったり癌になったりします。
２つ目の理由は，インスタント食品だと，栄養が不足して偏ってしまいます。例えば，手作りの豚汁はタンパク質が7.8ｇです。それに対してインスタントは4.8ｇです。手作りのほうが３ｇ多いです。インスタントは塩分が多いです。摂りすぎると体に良くないし，最悪の場合死ぬこともあります。
３つ目の理由は，インスタントのほうが味が劣ります。ラーメンの場合インスタントはこしがありません。手作りのほうがこしがあります。
４つ目の理由は，燃えないゴミがインスタントのほうが多いことです。カレーの場合手作りは，玉ねぎの皮，ニンジンの皮など土にかえるゴミが多いです。インスタントはビニール製やアルミ製の袋，燃えないゴミは燃やしてし

まうと有害物質が出て，燃やして小さくできないし，かさばるのです。

〈反対側への質問〉

K（消費者）タンパク質が手作りのほうが多いっていうのは，ほかの栄養でもそうなんですか？

T：さっきと同じですね。タンパク質だけだけど。

L（消費者）：心臓病になりやすいって言うけど，実際になった人はいるんですか？

I（消費者）：ラーメンの味のところで，こしがあるないって，どういう風に判断しているんですか。

H（消費者）：こしがないのが好きな人もいる。

T：好み？

F（消費者）：袋，ゴミ，有害云々て言ってるけど，有害じゃない袋ってあるんじゃないですか。あと，タンパク質が手作りのほうが多いっていうけど，賛成のほうで，インスタントのほうが多いっていうのがあって，矛盾していると思います。

T：（データを指し示す。）

K（消費者）：燃えないゴミがインスタントのほうが多いって言うんですけど，例はありますか？

T：あといい？（賛成，反対側に向かって）質問の間に反論のことも頭に，質問されたことも踏まえて，反論を考えてください。

〈反対側反論〉

L：質問についてです。（Lの質問に対して）資料は今ここにはないんですけど，青森県の男の人で，インスタントラーメンがとっても好きで，トランス脂肪酸をたくさん摂っていたために，癌とか心臓病になって亡くなったという結果があります。

T：質問の答えを言ってくれたね。じゃ質問の答えから行こうか。

M：ラーメンの好みは，その人の好みなんですけど，今回僕たちの好みでやっています。個人差はあります。

N：どう判断したかなんですけど，インスタントラーメンは，細いのですぐ切れちゃう。一回噛むと切れちゃうんですけど，手作りは２，３回噛まないと切れない。

C：えー！

N：まだ口の中にあると判断しました。

C：ゆで方が甘いんじゃない？

O：燃えないゴミは，他のインスタントにも多いかで，調べたのは，電子レンジのご飯。炊いたものは何もゴミは出ないけど，インスタントのご飯はプラスチックの容器とシートで21ｇのゴミが出ました。

T：計ったの？

O：味噌汁とかも手作りは野菜の皮とかで，インスタントは袋のゴミが出ます。

T：カレーと同じ傾向ね。

O：だし，カルボナーラ，リゾットとかいろいろ調べたけど，容器のゴミが出ます。

P：他のインスタントでタンパク質があるかっていうことなんですが，味噌汁，ビーフカレー，コーンスープ，ラーメン，きつねうどんなど，手作りの料理にはタンパク質が多く含まれていました。

T：そういうデータがあるそうです。

Q：さっき，インスタントでも栄養が摂れるって言ってたんですけど，栄養が摂れても心臓病になった人がいて，安全性が心配です。

T：栄養のことでは反論ない？

C：インスタントは８分，手作りは３時間って言ったけど，手作りのように時間をかけたほうがおいしくできるのでいいと思います。

T：時間がかかるのはいいことだって言いたいのですね。

C：時間がなかったらどうする！？

T：それが反論ね。

L：クリームシチューのインスタントが５か月もつっていうのは，作った状態からではなく，買った状態からですよね。

C：そうそう

〈賛成側反論〉

T：次に，賛成側の反論どうぞ。質問に答えながら。

R：長くもつのがいつからっていう質問で，手作りは人参は買ってからで２週間くらいしかもたないし，どっちにしても，インスタントが長くもつ。

R：４つ目の理由で，プラスチックのゴミが出るっていうけど，カレーで人参とかビニールに入っているんだから，そのビニールも有害物質を出すと思うんです。

C：ビニールに入っていないのもあるよ。

C：自分で作ればいいんだよ。

R：安全性が心配っていうけど，工場で作られているから逆に衛生面とかすぐれているから，衛生面で安全です。

T：このことですね。工場で管理されているから安全ですよって。

A：２つ目のタンパク質が手作りのほうが多いって具体例を挙げて言っているんですけど，

R：豚汁だよ。
A：タンパク質以外は，エネルギーとか全部手作りのほうがいいんですか？
S：３つ目こしがあるないのところなんですけど，あくまで例ですけど，僕の家の近くのすみれっていうお店のインスタントラーメンがあって，そのお店のラーメン自体こしがあって，それにまったく似た味でそのインスタントラーメンが作られていて，（とてもこしがあっておいしい）インスタントはこしがないとは限らない。手作りはこしがあるとは限らないと思います。作る人によってこしがあるないが決まるから。
U：付け足しなんですが，インスタント麺のほうがベースの味が濃いことが多いです。
C：ベースって何？
T：これはどれに対する反論？味？
U：味
T：味が濃いからおいしいって言いたいの？　～後略～

この後で，各自が本時の段階での自分の考えを書き，中立（消費者）から２，３名の児童から，どの論をもとにどう考えるようになったかを述べてもらって授業を閉じた。

(3)　本実践の成果と課題

①　消費者役（中立）の質問から見えるもの

消費者役の質問には，様々なものがあった。

・知識（知らないこと）を問うもの
・定義を確かめるもの
・具体例や詳しいデータを求めるもの
・データの信憑性を問うもの
・論点や問題点を指摘するもの

特にそのような質問をしなさいと指示したわけではないが，中立（消費者）の子どもが，インスタント食品をより深く知るために，また是非を考えるために，わからないこと，おかしいなと思ったところを率直に出したものである。一つ一つの疑問を確認し合いながらの対話型ディベートともいうべき形になっている。ディベート学習は本来，相手を説得する話し方，考え方を学ぶ学習である。本実践では，結果的に「説得」よりも「聞き合う」ことが主眼になって行われた感がある。

②　説得する相手は中立の人

しかし，勝敗にこだわり相手をけなしたりあらさがしになりがちで，後味の悪さが残ることも多かったディベートだが，この方式だと，対立になりにくく，賛成，反対，中立の三者がともに考えていく場になっていたと強く感じる。

③　時間がかかる（熱が冷めやすい？）

プロトコルのように，立論・反論のたびごとに中立側の質問を行ったので，丁寧なやり取りにはなったが，時間がかかったことは否めない。とても１時間では最後の反論までは行えず，次時に持ち越すことになった。次時に続きをやりましょうといっても，１日あるいはそれ以上の時間をおいてしまうと，どうしても子どもたちの熱は冷めてしまいがちになるであろう。

④　質問のさせ方やタイミング

今回は立論ごとに質問をしたが，賛成側，反対側の作戦タイムにそれと同時に質問の整理タイムのように時間を設けてもよかっただろう。また，事前に立論を質問側に出しておくことで，質問がスムーズに進められたかもしれない。

⑤　質問の質に着目させる

ディベートの学習では，ディベートが終わればそれで終わりではなく，どこかの場面で子どもたちが，論の述べ方や論のかみ合いなどについて振り返る時間が必要だと考える。今回の実践では，質問を取り入れたことの効果や，質問自体の吟味を子どもたちに振り返らせることも必要だったと感じる。①で述べたように多様な質問がなされたが，自分の考えを深めるのに有効だった質問，脇に逸れた質問，新たな情報を引き出すのに有用だった質問など，質問の質に目を向けることが排されていけば，次の学習での有用な質問につながるのではないだろうか。

Ⅳ　三角討論の実践(2)

平成22年７月　６年生　「スアレスのハンドは賞賛に値するか，非難されるべきか」

Ⅲ実践の子ども達を６年生で引き続き担当した。三角討論を更に経験させ，討論学習を積ませたいと考え，６年生でも実践を試みた。

平成22年，サッカーワールドカップが南アフリカ共和国で開催された。日本は，この大会でベスト16に勝ち残り日本中を沸かせる活躍を見せた。その準決勝，ウルグアイ対ガーナの試合が日本でも話題になった。

同点のまま延長戦へもつれ込み，延長戦の終了間際，ガーナのシュートに対し，スアレス（ウルグアイの選手）がゴール前でハンドをし，退場処分を受けた。ガーナがＰＫ（ペナルティキック）を外し，ＰＫ戦で勝負を決めることになった。ＰＫ戦の結果ウルグアイが勝利し，スアレスのハンドのおかげで勝利できたと，ウルグアイ国民は歓喜に沸く。マラドーナ以来の神の手ともいわれた。子ども達にも関

心のあるワールドカップの話題であり，世間でも賛否が分かれたスアレスのハンドについて，子ども達がどう考えるかを投げかけてみた。

1　学習の概要

①　新聞記事を読み教師から解説をする。

・ゴール前のハンドについて　・レッドカードで次の試合に出られないこと

・スアレスのシミュレーションについて　・監督のコメント

②　立場を決め，三角討論を行う。

立論→質問・答え→立論→質問・答え→

反論→質問・答え→反論→質問・答え→

☆「賞賛」側の根拠

i　スアレスはハンドの反則で罰を受けているのだから非難されるべきではない。

ii　ＰＫ（ペナルティキック）でジャン（ガーナの選手）が蹴って外したのがそもそもガーナが負けた原因になっている。

iii　反則を取られたが，スアレスは試合（見る人）を楽しませてくれた。

iv　ハンドより危ない行為もあり，スアレスのハンドくらいは非難されなくていい。

v　絶対にボールを触ってはいけないというルールはない。

☆「非難」側の根拠

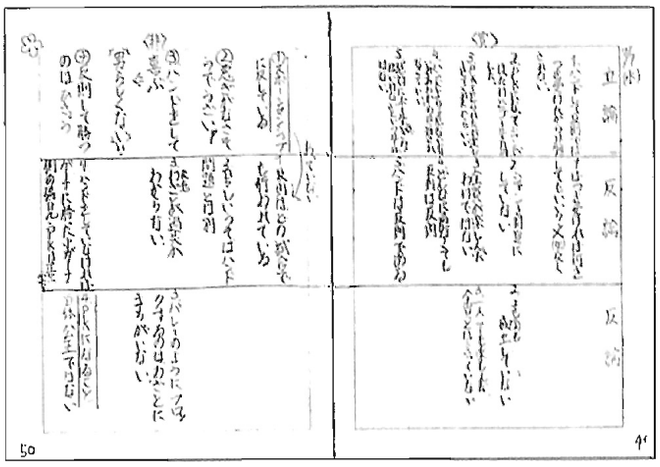
i　スアレスの行為はスポーツマンシップに反している。

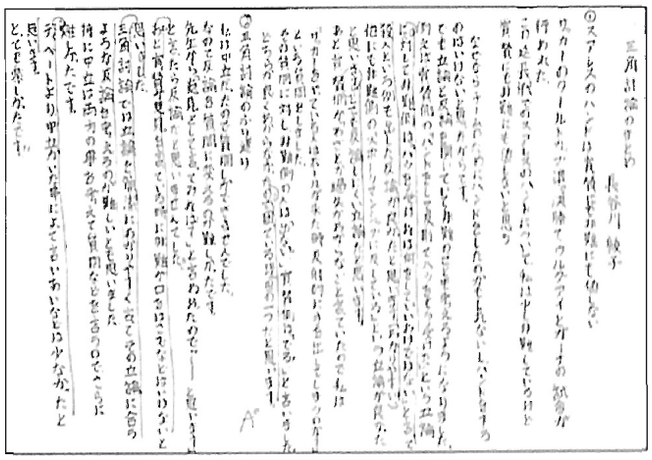
ii　スアレスのインタビューから，本人に悪かったという意識が感じられない。それが許せない。

iii　ハンドをして喜んでいるとは男らしくない。

iv　反則して勝つのは卑怯だ。

〈資料５〉





2　学習の考察

これに続く，反論は子どものワークシートで概略を示した。質問ではスアレスのハンドがどのくらい非常識なのかを理解しようとする質問が中立側から出された。サッカーに詳しい子どもがこれに答えるのに時間を費やし，それらの情報から賞賛，非難どちらを支持するかを各自が考えていった。

例えば，賞賛側のivについて，ハンドより危険な行為，反則とはどんなものがあるのか，そのときの罰則はもっと重いのか，という質問が相次いだ。相手をわざと転ばせる，首に手を掛けるなどはもっとも重い行為として即退場処分になること，ハンドの反則の中でも，ゴール前でのハンドは重いことが答えとして説明されると，それはサッカー選手なら当たり前にわかっていることなら，スアレスのハンドは悪質といえるのではないか，など，質問によって考えが徐々に深まっている様子がうかがえた。

vについても，絶対にボールを触ってはいけないというルールはない，というのはどういうことか。そもそもサッカーは手は使わないスポーツだという質問に対し，立論者側の意図が説明された。ルールではもちろん手は使えない。だが，プレイの最中に偶然手に当たってしまうことはよくあることで，もちろん罰則はあるがそれまで禁じているわけではない，という趣旨のことだったことが明らかになった。そこから更に，では，スアレスのハンドは偶然か，故意かという話になっていく。

子ども達の話し合いを振り返ると，２者対立のディベートという枠の中では十分に納得し合えない疑問や説明の不十分さを補う意味でも，中立の者が引き出していく役割の大きさを感じた。引き出されて答えながら整理することができ，その答えから更に問いや自分の判断へのヒントが得られるのである。

Ⅴ　３実践からの考察

３つの実践を経て，ディベートの弊害を克服できる道を探ったが，三角討論は，その一つの方策として有効ではないかと考えている。これはスアレスのハンドについての実践の後，子ども達の振り返りの中に多くの児童がその良さを書き記していることからもうかがえる。

☆子どもの振り返りから

Ｋ．Ｓ児：僕は，三角討論ではいかに中立の人を納得させられる様な意見を言えるかどうかが重要だと思いました。～中略～自分の意見を固持するのではなく，相手の意見もいいところは認めることが大切なところだと思います。三角討論をやることで，自分の意見と他の人の意見を認め合い，いい勉強ができたと思います。

Ｍ．Ｍ児：三角討論は，いかに中立を納得させるかというのがからんだので，冷静になれた。私は，賞賛側だったけど，非難側のスポーツマンシップに反するという立論は反論しにくく苦戦した。今度やるときは，強力な立論を言えるようにしたい。　～後略～

本稿では，三角で行うことの有効性について考察したが，討論学習の本来のねらいである，論理的に物事を考えられたかや自分の考えを深められたかについては，どの実践もデータや友達の考えをふまえ自分の考えを深められたことが，学習の記録から読み取れる。また，論理的に考える主張することについては，形によってというよりも指導者の指導の工夫や支援によって達成されるところが大きいと考えている。

三角討論は，ディベートとディスカッションを三角で行うが，パネルディスカッションにも通じる形であると考える。この後，６年生でパネルディスカッションも試みた。今後は三角討論とパネルを比較しよりよい討論学習のあり方を考えていきたい。

〈参考・引用文献〉

井上雅彦（2001）ディベートを用いて文学を“読む”―伝え合いとしてのディベート学習活動.
明治図書出版.
お茶の水女子大学附属小学校（2008）第69回教育実際指導研究会発表要項.
お茶の水女子大学附属小学校（2008）相互交流能力を育てる『意見・説得』学習への挑戦.
明治図書出版.
お茶の水女子大学附属小学校（2010）第72回教育実際指導研究会発表要項.
お茶の水女子大学附属小学校（2010）ともに育つ『ことば』の学習～公共性をはぐくむことばの力～.